

二人の死を体験して—私は、もう逃げない。—

徳永 和枝

## 1. 二人の死

### (1) 父の死

平成十六年十月二十六日、岡山県知事選挙の日の朝、母から電話があり「おじいさんが、交通事故に遭ったみたいなんよ。和ちゃん来てくれない？」と言うのです。私は、慌てて、車で倉敷に向かいました。どうぞ命だけは、助かりますようにと心で叫びながら。

救急車で搬送されたと言うので、私の職場である倉敷中央病院の救急センターに電話を入れ、「父が搬送されていないでしょうか？」と聞きましたが、「連絡は入っていないみたいよ。」と同僚は言うのです。妹から、「川崎医大に運ばれたみたい。」と電話が入り、行くと、川崎医大の救命センターはいっぱいで、岡山の日赤病院に搬送されていました。病院に着くと、父はICUに搬入され救急蘇生をされていました。

シャカステンにかかったCT写真は、頭の出血範囲が大きく、「一目でこれはものすごい事故だったのだと感じました。もう助からないと、私が見てもわかりました。足は両方骨折し、大動脈の破裂、そして血気胸を起こし、胸部から出たドレーンからは大量の出血で、それでも心臓マッサージを医師が続けていましたが、「もうやめてください。」と医師団にお願いしました。最後を、妹と静かに見送り、数分後に亡くなりました。目の前で息を引き取る父に、「お父さん、ありがとう。」と言いました。

私は、事故の相手に電話をし、「今、父が亡くなりました。」と言うと、相手の方は「そうですか。」と一言だけ私に言いました。

私は、悲しみというより呆然とし、自分で車を運転し、やっとの思いで、実家に帰りました。実家には、近所の方が来ていました。「朝会ったばかりなのに。」と絶句されていました。父は、朝食を暖かい縁側で母と一緒に食べ、黙って選挙に行ったそうで、母は「私には最期に何も言ってくれなかった。」と泣いていました。その夜母は、父の棺から離れることなく横で寝ていました。

私たち家族は、私が小学校四年生の時、岡山県の県北大佐町という所から倉敷に出てきました。屋根屋の仕事がないときは出稼ぎに行っており、私には、小さいときから父と遊んだという記憶がありません。父が居ない自宅では、近所に住む叔父が、紙の原料である、みつまたの仕事をしていたので、母がそこで働いていました。私達姉弟は、仕事をする母の傍でいつも遊んでいました。

長い間家族と離れて生活し、これではいけないと思った父は、倉敷のある運送会社に就職し、私達は、いつも家族そろって生活できる幸せを感じていましたが、両親は一大決心だったようです。そして父は定年を迎え、家のローンも返し、「これからは母とゆっくり生活できる。」と言っておりました。

十月二十六日、父は選挙の投票のためバイクで出かけました。お天気も良い日曜日、町内ではお祭りで、父と会った妹は、「気をつけて行きなさいよ。」と声をかけたそうです。

その帰り、父は、交差点で車と衝突し、何十メートルも飛ばされ、救急車が来たそうですが、心肺停止状態に近く、これは危険な状態だと判断した救急隊員は、ドクターヘリを要請し救急救命センターに搬送したと聞きました。私は、事故の後、救急搬送した救急隊員に話を聞きに行きました。「現場に着いた時はすでに意識はなかったです。」と隊員は話され、ものすごい衝撃だったのだなあと感じたのでした。その隊員とは、顔見知りで、「徳永さんのお父さんだったのですか。」と言われました。

父は、長い間運送会社で勤務し、バイクには何十年も乗っていますが、事故一つなく安全運転で、事故に遭った交差点は、危ないと分かっていたはずですが。そんな父がこのような事故で亡くなるとは信じられませんでした。

事故のあと警察署に事故の様子を聞きに行きました。すると、「今回の事故は、お父さんが信号無視で交差点に入り事故につながりました。」と説明され、「どうか、目撃者が誰かなど探すようなことはしないでください。」と言われました。私達は警察の説明に納得がいかず、では自分達で他の目撃者を探そうと事故に遭った同じ日曜日に、ブラカードに「十月二十六日にここで事故に遭った家族です。事故を目撃した人を探しています。」と書き、交差点に立っていると、「警察はなにしょんなら、わしが言ってやろうか。」とか、「いつまで立つ。おじいさんが悪いことになっとうろが。」などいろいろな事を言われました。そして、事故現場が、妹の自宅から近く、妹は「お姉ちゃんはここに住んでいないけど、私達は、ここに住んでいる。近所の手前もあるから、もう立つことはいやだ。」と言いました。私達は、もう立つことをやめ、目撃者を探すことを諦めました。

この事故では、相手の人は不起訴となり、お葬式に挨拶に来て、一目見ただけで、それから会うことはありませんでした。

## （２）娘（愛香）の死

そして昨年（平成十九年）の七月七日、私は、今日は、七夕だなあと思いながら仕事をしていました。夜勤でリーダー業務をしていました。

リーダーは、救急車の受け入れをしたり、他のメンバーをまとめたりと重要なポストです。そんな忙しくしている時、下の娘から電話が入り「あんな、愛香がゆうべから連絡がとれんのだって。お母さんこれから帰ってこれない？」と泣きそうな声で言うので、私は「どうして早く言わないの。」と言いました。仕事に出てくるときは、そんな事を話していなかったのに、驚き動悸がして、娘が住んでいる広島に一刻も早く行ってやりたいという気持ちになり、スタッフに事情を話し、広島に向かいました。広島に着き娘の彼から、話を聞きました。

その次の日、広島南署に行き、捜査の状況を聴きました。刑事さんから「言いにくいのですが、娘さんは風俗の仕事をしていました。」「娘さんが最後に会った人から、話を聞きたいと思っていますが、まだ署に来てくれていませので、詳しい事はわかりません。今の段階では、家出として捜査しています。」と言われ、私は初めて、娘の仕事を知りました。

私達は、印刷会社でアルバイトをしていると聞いていましたので、驚きと、どうしてという気持ちでした。

「しかし刑事さん、娘は家出する理由がありません。もっとしっかり調べてください。」と言いましたが、刑事さんは、「また何か情報がありましたらお知らせします。」との返事。しかし、この最後に話をしたという人が、犯人でした。

そして、職場の雇用主など会うことができ、娘は、とっても明るく、玄関の靴をそっと直したり、事務所の台所に洗い物が溜まっていると、洗ってくれたり、「誰がいる？」と声をかけると、すぐコーヒーを入れてくれたりと、「いまだき居ないお嬢さんでした。」「とってもいい子で、時間にはきちんとしていて、女房といつもほめていたのです。」と聞き、初めて広島での生活を知ったのでした。彼らは、「きっと何か事情があったとしても、私には連絡してくれると思い、待っているのです、事務所の皆も寝ずに捜しています。」とってくれました。

私達は、前日の疲れもあり、会う人にはすべて会ったので、一旦、自宅に帰ることにしました。

七月九日朝五時、広島南署の刑事さんから自宅に電話が入りました。「今、若い女性の死体が発見されました。お嬢さんではないかもしれませんが、確認に来てください。」という電話でした。新幹線の時刻も調べてくださり、広島駅に着くと、すでに刑事さんが迎えに来てくださっていました。

そして南署に着き、変わり果てた娘と対面したのでした。

## 2．父の死が教えてくれたもの

父の死が教えてくれたものは、交通事故の怖さと、この車社会でいつ誰が交通事故に遭うかもしれないということです。

それまで私は、交通事故で救急センターに搬送される患者さんをまるで人事のように思っていました。自分の家族が交通事故で亡くなるなんて、思ってもみなかったのです。

私は、この事故をきっかけに、保険の見直しをしました。今私が亡くなったら子供達はどうやって生活するのだろうと考え、家族全員の保険を見直すと、保険料をいくら払い、死亡時にいくら入るのか、まったくわかっていなかったことを思い知らされました。現実的な話ですが、私がまず考え、行った行動でした。

父は、生命保険をすでに解約していましたので、母に入る保険金はありませんでした。生活していくには、やはり、お金が必要だなあとしみじみ思いました。

## 3．悲嘆

(1) 悲嘆とは、悲しみに暮れること。医師が、患者さんからいろいろな情報を集め、血液や検査データを集め、一つの診断をするように、看護師も、患者さんからいろいろな情報を集め、看護診断をします。その診断の中の一つに、この悲嘆という言葉があります。

この悲嘆とは、人によっては、数ヶ月から何年も続く方がいて、それは一人一人が感じるところが異なるものです。被害に遭った方が、泣き悲しんでいる姿は、今は、悲嘆の時期だと考えてください。

(2) 私は、父が亡くなったあと一週間で職場に復帰しました。

亡くなった直後は、父の名義の銀行預金や国民保険を母の名義に直したり、お世話になった方に挨拶したりと、あっという間に、一週間が過ぎ、悲嘆に暮れる母を自宅に引き取って仕事に行きました。

私は、職場で、あるサークルのリーダーをしておりましたので、休むわけにはいかず、発表まであと数日という日、仕事が終わって朝五時までパソコンを打ったあと、実家に寄りゴミ出しをして、自宅に帰る途中でした。もうすぐ自宅という所で、睡魔が襲い、気がつくと私はトラックと正面衝突を起していました。私の、一方的な居眠り運転でした。幸い、怪我もなく胸部打撲だけですみました。その日もサークルの話し合いがありましたが、「階段から落ちて今日の話し合いには、行けません。」と嘘をつき休みました。なぜか、事故のことは言えませんでした。父の死後、私が休んでいる間に、サークル活動の遅れがあり、必死に頑張っていたのですが、無理が祟り事故につながってしまったのです。命だけ助かって良かったと本当に思いました。

しかし、私は身も心もボロボロでした。職場の上司から、「徳永さん、もっとにこやかに仕事しなさい。」と言われましたが、仕事に出るだけで精一杯でした。夜勤から帰る車の中で、一人大声で泣きながら帰ったものです。この状況で、にこやかに仕事をしろというのか、辛い思いを心から話せる人もいなく、一人で頑張った時期、振り返れば、私にとってはこの時期が父が亡くなった後の悲嘆に暮れていた時期だったように思います。

私達のサークルは、幸い賞をいただきました。リーダーとしてなんとかやりとげたという安堵感はありませんでしたが、上司との面接では、メンバーの事を考慮せず、マイペースなリーダーという評価でした。

この時期から、私は職場の人間関係がいやで仕方がなく、辞めようとかローテーションを希望しようとか考えていました。こんな思いまでして、どうして仕事を続けなければならないのか、と思いました。

(3) 昨年七月から八月にかけての記憶が、私にはありません。娘を送ったあと職場に約二週間で復帰しました。

朝起きて、これは夢ではないのかなと思って、和室に行くと、娘の遺影があり、お骨があり、これは現実だと思ったりしました。

私は、何をするにしても記憶が飛んでしまい、スーパーに買い物に行き、買った物をそのまま置き忘れて自宅に帰ったり、いつも行くスーパーなのに、エスカレーターがわからず一人でグルグル回りやっとの思いで自宅に帰ったり、漢字が書けなかったり、料理をす

るにしても夕食を作るだけで三時間かかり、「お母さんおかしいよ。行動が。」とよく下の娘に言われ、何処へ行くにも一緒に行動してくれました。

いつも、胃のあたりに何か重い物が乗った感じがあり、頭が重く、考えがまとまりませんでした。

私にとって娘を亡くしたと実感したのは、八月七日です。その日は娘の二十二歳の誕生日でした。誕生日が近づいても、娘から連絡がありません。私は、娘の携帯に電話をし、メールを送り、もうすぐ誕生日だけど、何か欲しいものがある？何を作ろうか？などと送っても返事が返ってきません。誕生日の日、やはり娘は帰ってきませんでした。やっぱり居ないのだと、初めて娘が亡くなった事を実感し、それまでは、広島に住んでいると思っていましたので、そのショックは言い表す事ができず、腹立たしい気持ちや、どうしてこんな思いをしなければならないのかと、広島に出さなければこんなことにならなかったのにと、自分を責めたりしました。この娘の誕生日が現実を受け止めるきっかけになりました。

娘が亡くなった、悲嘆に暮れた日々は、この現実を受け止めた日までをいうような気がします。

#### 4．疎遠になった人

(1) 娘が亡くなっても、私に同情してくれる人ばかりではありませんでした。

葡萄を作るご夫婦がいて、倉敷の玉島という所で小さな店を出し、売っていました。私は、帰り道なのでよくそのお店に寄り、葡萄を買って帰っていました。「お店だけではなかなか売れず、人の口込みで売らないといけない。」と言われるので、私は、好意で、職場の人にも声をかけ葡萄を売るお世話もしていました。

昨年八月、自宅にその葡萄のおばさんがご主人と一緒に来て、「またお世話になりたいのだけれど。」というお話。「今年は、お力になれないと思います。」と言いましたら、「どうして？」とおばさんが言い、自宅に入り娘の祭壇を見たのです。「どうして、あんたが守ってやれなかったん。」「あんなに娘のことを気遣っていたのに。あんたが悪いのよ。」と言われ、私は、頭をバットで殴られたような衝撃で、もうこの人と話したくない、と思ったのです。「今は、娘が居ない悲しみで、夜も、娘の服を抱いて寝ているのです。」と話すと、「娘の洋服なんか、抱いて寝ていたら、娘さんが成仏できないからやめなさい。」と言われ、私は、娘の洋服も抱いて寝てはいけないのか、それさえも許されないのかとまた涙が出てしまいました。その日おばさんは、「また店に来て。話を聞いてあげるから。」と言い残して、ご夫婦で帰っていきました。

私はどうしても店に行きたくなく、連絡も取っていなかったのですが、またある日、葡萄のおばさんが自宅に来ました。「どうして店に来ないの。娘さんは一人でさ迷っているわよ。現場で娘さんの魂を持って帰ってあげないとどうするのよ。」と言うのです。「魂なんて私には見えないし、どうやって持って帰れるんです？」と聞きました。「だから、店に来たらいろんな話をしてあげるのに。私の娘は霊と話ができるのよ。」と言われました。私が

「今は、誰とも話したくないのでそっとしててください。」と言うと、「私とも話したくないの？」と聞かれ、「また元気がでたら行きます。」と言ってその日は、引き取っていただきました。

あまりの衝撃に、私は、下の娘に相談しました。「現場に行かないといけならしい。そうでないと魂を持って帰らないと一人でさまよっているんだって。」と話すと、「お母さん、冷静になって。殺害現場を見たらお母さん気分が悪くなって倒れるから。今急いで行かんでもいいのよ。」と言われ、私は冷静さを取り戻しました。

被害者遺族にとって、ああすればよかったのにとか、こうすればよいのにとという言葉は、被害者遺族を苦しめ、自分を責めてしまいます。過去を振り返っても、どうすることもできない現実がそこにあり、残された遺族がいかに少しでも気持ちを楽に日々を過ごせるかが、大切ではないかと思うのです。

(2) 今から十数年前、私は消化器内科に勤務しており、急性期の病棟でした。入院される患者さんは、肝臓癌や膵臓癌の患者さんが多く、残された日々をどのように過ごしていたか悩んでいました。でも、今のように癌告知がなされていなかった時代で、患者さんに有意義に過ごしていただくには、やはり、癌の告知は不可欠だ感じていました。癌の告知の話になると、上司とぶつかったり医師とぶつかったりもしました。私は、癌の告知についていろんなセミナーに行ったり、東京の癌センターに研修に行かせていただく機会もありました。

数年前、実は私も癌の告知を受けました。人間ドッグで子宮癌の検診を受けたところ、婦人科の外来に行くようにと通知がきました。婦人科の外来に行くと、主任部長の先生が、「あなたは、子宮癌です。クラス です。手術が必要です。」と言われ、癌告知派の私でしたが、さすがに自分が癌と診断され、告知を受けるとショックでした。癌には、いろんな顔をした癌がいます。また、いろんな、性質の癌もいます。クラス が何を意味しているのか、私には理解できました。自宅に帰り、泣きました。

そして、手術を受け、先生から二週間の診断書を書いていただいていたのですが、仕事柄、入院は三日が限度で、先生にお願いして「何か異常がありましたら、来ますから。」と言って、退院しました。退院後、もう旅行にも行けなくなるかも知れない、もう友人とも会えなくなるかも知れないと考え、積極的に人に会いました。そして、病理の結果がでたので、受診に行きました。先生から、「徳永さん、貴方は癌ではありません。異形細胞でした。」と言われ、思わずやった、ああ儲かったと思いました。何を儲かったかわかりませんが、人生に、こんな大逆転があるのかと思ったのです。これが、私の癌体験です。

私は、そのセミナーで、ある医師と出会いました。泌尿器科を専門とされ、ターミナルケアでは有名な医師でした。

その先生が、四国の高松で開業をされていたので、私はお祝いと娘愛香のことを手紙に書き、送りました。しばらくして、先生から返事がきてその中にある一冊の本が入ってい

ました。それは宗教の本でした。そして、「私の知り合いに犯罪被害の支援をしている方がいますので、よろしかったら、連絡しますよ。」と書いてありました。それだけでした。私はそんな宗教の本なんか欲しくなかった。もっと人間として温かい言葉だけ欲しかった。その先生に対し、私は愕然としたのです。

私は、無宗教です。仕事をしていて、現場では救急車で患者さんを迎えに行き、心筋梗塞や大動脈破裂など、今この患者さんを生かして病院まで帰らないといけない、救急車の中で、できる限りの処置を行い、信じられるのは自分の力だけという思いを何度もしてきた私にとって、泣きたくたって誰も助けてくれない状況や、自分が何とかしなければこの場は助からないという経験を繰り返していて、宗教は、私にとって無縁です。ここで、誤解しないでいただきたいのですが、宗教が悪いと言っているのではないのです。こんな生き方を続けてきた私にとって、宗教は必要ないのです。

多分、この私が生きるスタイルは、これからも変わることはないと思います。

このお二人とは、自然に距離があいてしまいました。

## 5. 警察への怒り

(1) 父の死後、警察からは、被害者支援団体の説明や、被害者支援の刑事さんの話もなく、ただ泣くしかなかった私達遺族は、月日の経過が少しだけ心を癒してくれたのでした。

しかし、娘が亡くなった時は、状況がかなり異なりました。

七月九日、朝五時、広島南署から電話があった時、すでに娘の実名は、ラジオで流れ公表されていたのです。そして、私達は公表したという事実を知らずに娘を岡山に連れて帰りました。この事実は、葬儀が終わった後、弔問に来てくれた友人から聞いたのでした。

なぜ、警察は、私達に公表したという事実を教えてくれなかったか。これは倫理的な問題で、大変大きな問題だと感じました。そして、私は弁護士の介入が絶対的に必要だと感じ、被害者支援団体に電話をしました。これが、被害者サポートセンターおかやま（V S C O）との出会いであり、高原勝哉先生にお世話になることになりました。

先生にお話し、やっと私の気持ちを理解してくださる方に出会えた、確信しました。それまで、私の辛い気持ちや、広島県警が私達遺族に確認がないまま、実名を公表したという事実を話しても、私に共感してくれる人はいませんでした。

(2) 自宅に帰ってからというもの、私達は、目に見えないメディアに怯えながら、息を潜めて生活していたのです。

葬儀が終わった後、週刊誌が葬儀会場に来ていた事を知りました。それからというもの、自宅に記者らしい人が、毎日のように訪ねて来ました。勿論、私達は取材に応じる事はなく無視していました。近所にも記者が来ていたと聞きました。これは、実名を報道された二次被害以外の何者でもありません。私は、すぐ広島南署に苦情の電話を入れました。すると、「これは広島県警広報部と同時進行で行っています。」というコメントでした。

後日、私は広島南署に行き、広報担当者に会いました。「私達がどんな思いで生活しているか、わかりますか。」と言うと、「これだけの凶悪犯罪です。公表しなければならない状況でした。現場は、騒然としていて、近隣住民に早く事件の内容をお知らせするのが義務だと思いました。」と言われました。また、「娘さんの職業から、この事件が起きるかもしれないと、覚悟して行ったのではないですか。」と言われ、さも娘が悪いような言い方で、事件が起きてもおかしくないような言い方をされました。この事件で被害者である私達が、なぜこんな屈辱を受けなければならないのか、心ない言葉が遺族をまたも傷つけました。

国民の知る権利があるならば、私達被害者の人権は誰が守ってくださるのでしょうか。誰が、私達のプライバシーを守ってくださるのでしょうか。娘も、私達遺族も、国民です。この事件の、公益性とはいったいなんなのでしょうか。私はいくら考えても分かりません。

十八歳の何処にでもいるような少年が犯す犯罪を、どうやって防ぐことができたでしょう。また、少年は十八歳ということで、実名もでません。娘だけが、ネットに実名がでたり、新聞に実名や職業がでたりと、私達ではどうする事もできないところで、無防備に報道され、私達遺族にとってこの上ない悲しみであり、心を傷つけられました。私は、警察が行った実名発表による被害であると思いました。娘の名前が公表されたことで、地域住民の公益性が図れたとは、全く思えません。

この問題に対し、私は広島県公安委員会に対し、苦情の申し出を行い、数ヶ月経ってやっと返事がきました。この事件による実名発表は、公表せざるを得ない状況でしたという返事でした。この返事に対し、犯人に対すると同じくらい、私の中で、怒りがこみ上げてきました。

## 6．身近な支援者

私達が、娘の悲しい事件から、これまで生活できたのは、皆様の温かい支援があったからです。

その一人が、下の娘のボーイフレンドでした。「辛いときは、俺がついにとってやるけん。」と彼は言ったそうです。私には、王子様に思えました。彼は大学生で、ガソリンスタンドでアルバイトをしていました。ちょうど七月は夏休みで、彼は、アルバイトが終わると、夕食を食べに来てくれました。昼間は、寂しくないのですが、夜になると寂しくて怖くて、食欲もなかったのも、彼が来ると、食事でもでき、食事の支度をする事もできました。下の娘から「お母さん何時間も台所に立っていたのに、たったこれだけ？」と言われました。肉じゃがを作るだけでもかなりの時間がかかったのです。辛い時、家族のように過ごしてくれて彼には本当に感謝しています。

また、八月七日は娘の誕生日でした。高原先生、V S C Oのスタッフの皆さんが、自宅に来てくださり、ケーキを食べてくださったことは、大変嬉しく、一緒に何かを食べてくださるという事は、素晴らしいコミュニケーションだと思いました。

また、私は二週間で仕事に復帰しました。

上司に、今日はこんな事がありましたなどとメールを入れると、きちんと返信してくださり、マスコミが来て恐いですと相談していると、病院の看護師のマンションがあるので、しばらくそこに住んだらどうと、看護部長が、言ってたよとメールをくれました。上司も、病院の上層部に相談してくださっていました。上司のメールを読み何度も泣きました。そのメールの中に、「あなたを心配している仲間がいるのだから、徳永さん、出てきなさい。」という言葉は、本当に私の心を勇気づけてくれました。

そして、高原先生にも「私は、世間が怖いのです。」と話しました。すると先生から、「あなたは、看護師なんだから、患者さんのことだけを考えなさい。」と言われ、私には看護師の仕事しかないと改めて思いました。

このお二人の言葉が、私の背中を押してくださり、仕事に復帰できました。私は、もうへんなプライドを捨てよう、失うものは何もない、精一杯頑張れば認めてくれる、そんな思いだけでした。

職場に復帰すると、皆さんが温かく私を迎えてくれました。「徳永さんを見ると涙がでる。」と言い、あんなにギクシャクしていた人間関係でしたが、嘘のように今は苦痛なく仕事に出られるようになりました。

私は、仕事に復帰する以上、絶対に甘えられないと自分に言い聞かせました。信頼がないとチームでは働けません。私は、必死でした。白衣のポケットには、いつも亡くなった娘の写真を入れています。きっと娘が「お母さん、頑張って。」と励ましてくれているからだと思います。

我が家には、二匹の犬がいます。知らない人が来ると、玄関で鳴いてくれるので、マスコミが来たときも大変助かりました。この、二匹の犬も身近な支援者かもしれません。

## 7．二次被害

二次被害とは、被害に遭った上にまた新たな被害に遭う事です。

私の場合は、娘が広島から岡山の地元の葬儀会館に着いたときから、始まりました。すでに、近所の方や親族が葬儀会館に来ていて、御棺にいる娘の顔を見て、「愛香ちゃんは、どうしてこんなヒドイ顔になっているの。」と、娘の霊前で言われました。私は、主人に、娘の顔を見られたくないという思いで、「密葬にして欲しい。」と訴えました。すると、近所の方が「首を吊った人だって、普通の葬儀をしたのに、どうしてあんたところは、葬儀ができんの。」「あんたの意見は、ここでは通用せんよ。」と攻撃的に言われ、主人に再度密葬にして欲しいと泣きながら訴えました。しかし封建的な思想が強い田舎では、葬儀のかたちをどのように行うか、男性が決めます。私は、その葬儀の話し合いに入れませんでした。結局、葬儀は通常のやり方で行われ、後日週刊誌に、この葬儀の内容が記事として載りました。

また、娘の顔写真は、中学の卒業アルバムの写真が載りました。この写真を見て、被害に遭った上になぜこんな写真まで載せないといけないのか、怒りでいっぱいでした。写真

を提供した人も、人間の心をもっていない人だと感じ、なぜ加害者の名前や写真が載らないのか、娘が何を悪いことしたのか、腹立たしさでいっぱい、その怒りは、やはり、私達遺族に告げられなかった、警察の実名の公表というところにいきます。

この葬儀の事で、主人との間に溝が入りました。密葬にしてくれなかったという思いは、私の心の傷となって残っています。もし警察が、実名を公表した事を私達に話していてくれたなら、私達は、娘を、広島で密葬にして帰ることもできました。

この葬儀についても、警察による二次被害以外の何者でもないと感じています。

また、父が亡くなった後、一番心を痛めていたのが、下の娘です。事故の当日の朝、父から娘に電話があったそうです。いつもの電話と思って、出なかったそうです。そして、「おじいちゃんが事故に遭ったみたいなんよ。真子も一緒に行く？」と聞くと、娘は、「うちで待っているから。」と一緒にには行きませんでした。娘は、もし、おじいちゃんの電話にでていたら、数秒でも時間が狂っていたら、事故に遭わずにすんだのではないかという思いで、友達とも話ができなくなり、高校受験を控えた大切な時期なのに、保健室で勉強したり、夜になると精神的に不安定になったりと、身近な死が引き起こした二次被害に、私は、気がつきませんでした。

娘は、このつらい状況を、誰にも話すことができず、ただ耐えることしかできず、私がしっかりしなければという気持で、いつも気が張り詰めていたのです。

## 8．私の歩むみち

職場で、今でも忘れられない体験があります。

それは、三歳の男の子が、意識障害で救急センターに搬送されました。母親が、付き添って来ていましたが、いかにも生活に疲れている感じで、男の子は、処置室の前のドアのところで、失禁し、泣き叫んでいました。私が、「お父さんはいないの？」と訊ねると「父親は帰ってこない。」というのです。処置をしている男の子の気道からは、大量の七味唐辛子が、吸引されました。医師が、「これが、気道からたくさん出てきた物です。」と母親に見せましたが、母親は、ただ泣くだけでした。

すると、警察が五、六人来て母親を連れて行ってしまいました。私が「なぜ連れて行くのですか？」と言うと「虐待の可能性があります。」というのです。残された男の子は、救急蘇生のかいもなく亡くなってしまい、遺体は救急センターの個室に一人いましたが、また警察が来て袋のような物に遺体を入れ、司法解剖に連れて行きました。なんとむごい光景だろうと、人間を扱う姿ではないと怒りさえ覚え、翌日の新聞によると、虐待は日常的に行われ、男の子の兄は施設に保護され助かったそうで、母親は逮捕されていました。

もっと早く、この男の子を助ける事はできなかったのかと思ったのです。

また、ある日夜勤をしていると、五十代の女性から電話があり、夫に暴力を振るわれ、受診しようか迷っているという電話でした。「二十数年暴力に悩まされ耐えてきたが、ここで夫は定年を迎え、家にいる時間が多くなり、また暴力が増すのではないかという不安が

あり、でも自宅にもあり息子夫婦の手前などを考えると、私が我慢するしかない。」と言われました。私は、この電話の患者さんに対し、「私だったら家を出ます。」と話し、「これから年を重ねると、精神的にも肉体的にも回復に時間がかかります。どうぞこれからの人生は、自分らしく生きてください。」とお話ししました。翌日、私を訪ねて救急センターに連れられ、受診をしますと、言われていたそうです。

このように、被害に遭った患者さんがたくさんおられても、救急センターでは、患者さんの様々な問題に対し、支援の限界があります。また、どうかかわったらよいのかわからず、被害に遭った患者さんを置きざりにしてきました。

私は、被害者支援を受ける側から、支援を行う側になろうと思っています。私と同じような被害者が声を出すこともできず、ひとりで悩んでいる方が、たくさんおられます。私は、『もう逃げない。つらいことから。』という思いです。

また私は、娘の死を無駄にしたくありません。同じ報道被害に遭った方と、その思いを訴えていこうと思っております。それが、娘からもらった、私の宿題だと思うのです。

父が亡くなった時、ただ泣く事しかなかった毎日でした。今、娘が亡くなって、被害者サポートセンターおかやま（V S C O）のスタッフの皆さんや、高原先生がいてくださるという安心感が、毎日の生活を支えてくれています。娘が亡くなって、私は、二次被害、三次被害が起こるかも知れないという不安感がありました。事件の後、下の娘には、いつもV S C Oの電話番号を書いたメモを持たせていました。「お母さんに何かあったらここに電話しなさいよ。」と言い聞かせていました。

また、高原先生は、「素敵な女性だから、読んでみなさい。」とある本を推薦してくださいました。それが、『大藪順子・立ち上がる選択』でした。彼女は、自分が性暴力被害に遭って辛い毎日を、職業であるカメラによって同じ立場の被害者を公表するという活動を通じて、立ち上がっていきました。この本を読んで、私はたくさんのエールをいただきました。被害に遭った時が、終わりではなく、被害に遭った時からが始まりである。まさにこの言葉に感銘を受けたのでした。

言いすぎかもしれませんが、被害に遭った者が、様々な問題を訴えなければ、何も解決しない、それが被害者の役割ではないかと思うのです。私が娘を広島に出したのは、娘の夢を叶えてやりたかったからで、こんな姿になって私の所に帰って来るなんて、私が広島に出さなければこんなことにならなかったと、自分を責めました。娘の所に行こうかと何度考えたことでしょう。しかし、私が居なくなったら、誰が娘の霊を慰めてくれるのでしょうか。いつか、あの世というものがあるならば、娘に、「お母さんは、あなたが居なくなっても、精一杯生きたよ。」と言いたいと思います。

これから、私がしなければならないことは、無限大にあり、どうして私だけがこんな訓練を受けなければならないのかと思った事もありますが、これが私に与えられた仕事で、私は、私にしかできない支援をしたいと思っております。